

A看護短期大学における英語教育へのニーズ分析 ー シラバス改善や新たな教材開発を目指してー

杉山明枝¹⁾ カレイラ松崎順子²⁾

要 旨

本稿では学生と教員対象に実施した質問紙調査をもとに、彼らの英語に対する認識を把握し、医学英語教育に対するニーズを分析する。さらにこの分析結果をもとに新たなシラバスや教材開発の可能性を見出すことを目標として設定した。

質問紙調査から、学生間、学生と教員間、ひいては教員間に認識の差が生じていることが明らかになった。これは彼らの間に存在する「コミュニケーション能力」、ひいては「看護における英語コミュニケーション」に対する見解の差であると考えられる。特に教員が求めるものと学生が求めるものとの間に大きな格差が生じては、効果的な教育を行うのは困難であり、この解決策として教員がそれを明確に示し学生に周知させることが求められる。その上で学習期間や内容、使用教材に対しても再考されるべきであり、またその実現のためには英語教員のみでは充分に対応できない専門知識を補完できる看護分野専門教員と英語教員が協力、連携した授業、ならびにシラバスの作成が重要な要素になるといえる。

キーワード：コミュニケーション能力、看護における英語コミュニケーション、
看護師および看護学生に必要な英語、一般英会話、情意的要因

I はじめに

医学の分野における急速な国際化の影響から、現場では外国人患者に対応できる英語力を身につけた「医療人」が求められている。看護師をはじめ、医療の現場で医師と協同で働く専門職員を総称した「コメディカル」¹⁾を養成する大学や短期大学、および専門学校においてもこうした現状をふまえて医学英語教育が「必修科目」として設定されている。こうした学校では国家試験合格を目的に設定された過密カリキュラムの中に英語科目を組み入れているため、学生のニーズを把握し、それに見合う内容の講義を行わなくてはならない。学習者が学びたいことを知り、彼らの要求を満たす内容の講義を行えば学習者の動機づけが高まり、効果的な英語教育が行なえると考えられているからである²⁾。言い換えれば、学習者の要求を無視してシラバスを作成し授業を実施することは「非常に危険」³⁾であり、学生に

は英語が「余計な負担」⁴⁾になってしまうとも限らない。

こうした視点から「コメディカル（看護師、理学療法士、作業療法士など医療現場において医師と協同で働く専門職員）」⁵⁾養成学校において行なわれた医学英語教育のニーズ分析には多くの研究事例がある。一例を挙げると、コメディカル養成過程のシラバス作成を目的とし、学生並びに各課程の専門教員にアンケート調査を実施した研究では、学生と教員間に医療現場における英語のニーズに「ずれ」が見られたと報告されている⁶⁾。すなわち、学生は外国人患者とコミュニケーションを行うための英語力を習得したいと望んでいるのに対し、教員は英語文献を読むための読解力を要求していたという⁷⁾。その一方で、現場に出ていない学生が仕事上どのような英語を使うのかを正確に認識しているとは考えにくく、学生のニーズにのみ耳を傾けるのではなく、教員側のニーズも反映させたカリキュラムやシラバスの作成が望ましいと報告している事例もある⁸⁾。

医学英語教育においてコメディカル学生が学んだ

1) 荒川区教育委員会

2) 東京未来大学

いことは何であり、その一方で現場を知る教員が学生に学んでほしいと望むものはどんなことであろうか。本研究では上述の観点から、A看護短期大学における英語教育へのニーズに関し、学習者（学生）と教育機関（教員）の双方向から調査、および分析を行う。そしてその結果から新たなシラバスや教材開発の可能性を見出すことを目標として設定する。

II A看護短期大学における英語教育

A看護短期大学のカリキュラムは「生命の尊厳と人間の理解を基盤に豊かな人間性を培い、思いやりの心と専門的知識に基づいた的確な判断力、健康支援のための看護実践能力を有し、主体性をもって行動できる人材を育成する。さらに、生涯にわたり専門性を追求し、保健医療福祉チームの一員として地域社会に力強く貢献できる人材を育成する。」⁹⁾という教育理念の下、『人間理解の基礎』『人間と健康』『基礎看護』『発達段階・状況に応じた看護』『看護の統合』『臨地実習』にカリキュラムが区分されている¹⁰⁾。筆者が担当する「医療英語」は『人間理解の基礎』¹¹⁾に組み込まれ、1学年後期に実施される。1学年前期には「英会話」が設置され、「英語」はこの2科目である。

A看護短期大学においては、高校を卒業したばかりの18歳から社会人経験の豊富な50歳代まで幅広い年齢層が入学する。また入試の形態によっては英語を学力試験として受験せずに入学する学生もいるため、学生の英語力や英語学習に対する意欲はさまざまであり英語に対し苦手意識を持つ学生も存在する。

III 研究目的

本稿ではA看護短期大学の学生及び教員の医学英語教育に対する認識を把握しそれに対するニーズを探るとともに、その結果からシラバスの改善や新たな教材開発の可能性を見出すことを目標として設定する。

IV 研究方法

1 調査対象者

学習者として、看護学科1年生と3年生を調査対象とした。入学して間もない1年生と実習を経験した3年生の間では意識の差が出るのではないかと推測したからである。また、教育機関側の代表としてA看護短期大学看護教員を調査対象とした。この理由として、大部分の看護教員が臨床経験を持つため、現

場からのニーズと教育機関側からのニーズ双方を持つ対象でありうると判断したためである。

2 調査方法

看護学科1年生に対しては筆者の担当する医療英語の第1回目授業（9月13日）終了時に、また3年生に対しては特別授業3時限終了後（9月24日）に実施した。質問紙は筆者が学生一人ひとりに対し配布と回収を行なった。教員には9月13日に各メールボックスに質問紙を配布し、郵送回収できたものを対象とした。最終分到着日は9月25日である。質問紙回答者数（回収率）は看護学科の1年生（2010年度）75名（93%）、3年生（2008年度）36名（42%）、教員18名（60%）である。

3 調査期間

平成22年9月13日～25日

4 調査内容

質問紙は宮崎県立看護大学の新たなシラバスと教材開発を目標に、学生、教員双方に対して実施されたニーズ分析調査の先行研究¹²⁾に基づき作成した。大学と短期大学という違いはあるが、公立の看護師養成校という点で宮崎県立看護大学、およびA看護短期大学両校の環境が類似すると判断したためである。前述の通りA看護短期大学では1学年前期で「医療英語」、また同学年後期で「英会話」がカリキュラムに設定されているが、本研究における質問紙調査は、そのどちらかの科目に特化したものではなく、A看護短期大学における医学英語教育全般に関し実施したものである。質問紙調査実施前に学生および教員にプレテストを実施し、回答のしやすさ等を聞き取り調査した上で、質問項目を若干改善した。改善点は次の2点である。教員用質問紙に「学生の英語力」を問う項目を設定したが、「英語を担当しない教員が学生の英語力までは把握できず回答できない」との指摘を受け、削除した。また学生用質問紙の項目11)に「看護に関する英語を誰に教えてもらいたいのか」を設定したが、この質問中の「誰に教えてもらいたいのか」の「誰」が分かりにくいとの指摘から「誰」の後に「ネイティブ、日本人等」と付記した。

学生に対する質問内容は以下の12項目である：1) 看護師に英語は必要か、2) 看護短大で英語は必要か、3) 現在の英語教育への満足度、4) 看護短大におけ

る英語コミュニケーション能力の養成は必要であるか、5) 何年生まで英語の授業を実施すべきか、6) 看護短大の英語教育で伸ばしたい能力、7) (質問6に対し) どの程度まで力をつけたいか、8) 看護師として必要な英語力、9) 臨床看護師と研究者の間では必要な英語力が異なるか、10) 看護に関する英語学習への意欲、11) 看護に関する英語を誰に教えてもらいたいのか、12) 英語検定取得級。質問1) から5)、および9)、10) に関しては4件法に基づく選択方式で、選択肢は(4: そう思う 3: まあそう思う 2: あまりそう思わない 1: そう思わない) である。質問6) から8)、および11)、12) に関しては自由記述式である。一方教員に対する質問項目は上記(質問3)、6)、7)、10)、11) を除く) の他に、看護学生の英語教育における目標、適切と思われる使用教材などについて質問をし、自由記述式で回答を求めた。

5 分析方法

看護学科1年生および3年生と看護教員の質問紙の各項目に対して平均値と標準偏差を算出した。

6 倫理的配慮

プライバシー保護の観点から無記名により実施した。その他、参加の自由、個人情報やプライバシー保護、および質問紙の回答によって学生自身が不利益を被らないことなど、倫理的配慮を十分に行うことを口頭で説明した。結果は論文執筆や学会発表等の目的以外には使わないこと、またあくまでもシラバス改善や教材開発のために質問紙調査を行なうゆえ、率直な意見を聞かせてほしい旨を伝え、同意を得られたものに対してのみ実施した。

V 調査結果

1 看護師、および看護学生にとっての英語の必要性と看護短大における英語コミュニケーション能力養成の必要性 (表1、2参照)

「質問1. 看護師に英語は必要か」、「質問2. 看護短大で英語は必要か」、「質問4. 看護短大における英語コミュニケーション能力の養成は必要であるか」の3項目で、これらの質問に対し、全ての調査対象において高い数値を示し、学生、教員双方とも高い割合で看護師および看護学生にとっての英語、また英語コミュニケーション能力の必要性を感じていることが分かった。学生に関しては1年生の平均値に対し3年生の平均値が高くなっている。特に、

質問4に対しては教員よりも3年生のほうが高い。

2 現在の英語教育への満足度 (表1参照)

「質問3. 現在の英語教育への満足度」への回答は、選択肢(4: そう思う 3: まあそう思う 2: あまりそう思わない 1: そう思わない) に対し、1年生の平均値は2.49、3年生2.47と双方とも学生の満足度が低い。

3 A看護短大における必要な英語学習期間 (表1、2参照)

「質問5. 何年生まで英語の授業を実施すべきか」に対しては、1年生の平均値は3.22、3年生3.24、教員は2.83であった。選択肢は(4: 1年生 3: 2年生 2: 3年生 1: 必要ない) であるため、必要な英語学習期間は両学年とも2年生、または1年生まで、一方、教員は平均値2.83であるため、2年生、もしくは3年生まで英語教育が必要であると考えている。

4 短大の英語教育で伸ばしたい能力

「質問6. 短大の英語教育で伸ばしたい能力」への回答は1年生では英会話(29名)が最も多く、次いでコミュニケーション能力(16名)、医療英単語(8名)、リスニング(6名)、リーディング(3名)、文法(1名)、ライティング(1名)、大学院進学のための知識(1名)であった。3年生では英会話(12名)、英単語(3名)、コミュニケーション能力(1名)というように、1年生同様英会話を学びたいと回答した者が最も多い。

5 どの程度まで伸ばしたいか

「質問7. (質問6に対し) どの程度まで力をつけたいか」には、1年生では「日常英会話程度」(26名)が最も多く、「外国人患者に対応できる、主訴が聞き取れる程度の英会話力(13名)」を大きく離す結果となった。その他「コミュニケーション能力」(5名)、「挨拶・自己紹介程度」(4名)、「海外旅行で困らない程度」(2名)、「TOEIC500点くらい(海外で働きたいため)」(1名)、「論文が読め、書けるくらい」(1名)、「英語の医学雑誌がほぼ辞書なしで読める」(1名)、などの回答も見られた。3年生においては「日常英会話」(6名)、「コミュニケーション能力」(2名)、「外国人患者に問診が出来る程度」(4名)、「論文を読める程度」(2名)、「外国人看護師に対応できる程度」(1名)などである。

6 看護師として必要な英語力

「質問8（教員は質問6）. 看護師として必要な英語力」に対しては、1年生では「外国人患者の主訴が聞き取れる、外国人患者に対応できる（23名）」が最も多く、「日常英会話（14名）」、「コミュニケーション能力（12名）」、「病院における会話（医師との会話など）に対応できる（7名）」、「医療英単語の習得（4名）」「カルテ記入（2名）」が続いた。その一方で「日本で働くならそこまで高い英語力は必要ないと思う。話せるに越したことはないが」という回答もあった。また「英語を聞き取ろうとする力」「外国人に話しかけられても動じない」等、情意面からの回答も見られた。3年生では「日常英会話（7名）」が最も多く、続いて「外国人患者に対応できる程度（2名）」、「医療用語（2名）」、「診察の場で使う言葉（1名）」という結果が出た。英会話に関しては「普通に英会話したい（医療英語に限定せず）」とする回答も見られた。また「質問6または7と同じ」が何点も見られた。

教員の回答においては、外国人患者の主訴を聞きとれる、外国人患者との会話（9名）、文献、研究論文読解および執筆（5名）、カルテ読解（3名）、医療専門用語の理解（3名）、コミュニケーション能力（3名）、苦手意識を持たず臆することなく話す（3名）が挙げられた。

7 研究として必要とする英語と一般看護師が必要とする英語の違い（表1、2参照）

「質問9（教員は質問7）. 臨床看護師と研究者の間では必要な英語力が異なるか。」に対して選択肢は（4：大いに異なる 3：少し異なる 2：あまり

異なる 1：全く異なる）である。教員は平均値3.12、また1年生は平均値2.99と高い数値を示したのに対し、3年生は平均値が2.54であり、かなり低かった。

8 看護に関する英語学習への意欲（表1参照）

「質問10. 看護に関する英語学習への意欲」に対しては、1年生の平均値は2.84、3年生の平均値は3.07であった。選択肢は（4：大いに持っている 3：少し持っている 2：あまり持っていない 1：全く持っていない）であるが、両者ともそれほど高い数値ではない。

9 学生が求める英語指導者

「質問11. 看護に関する英語を誰に教えてもらいたいのか」に対しては、1年生の回答ではネイティブ（24名）、日本人（20名）、特に希望なし・どちらでもよい（19名）、日本人とネイティブ（9名）の順であった。3年生ではネイティブ（10名）、日本人とネイティブ（4名）、特に希望なし・どちらでもよい（3名）、日本人（1名）という結果が出た。両学年ともネイティブと答えた学生が最も多いが、1年生では日本人と答えた学生との数にあまり差は見られない。「ネイティブ」と答えた回答者の理由として多く見られたのは「日本人は発音が下手」というものであった。一方、ネイティブに関しては「日本語の上手な人」という条件付回答や「ネイティブと日本人」とする回答も多く、「ネイティブには会話、発音を、日本人講師には文法を」と明言するものも見られた。

「特に希望なし・どちらでもよい」と答えた者でも、「教え方の上手な人」「医療現場で働く人」「看

表1 各質問項目の平均値と標準偏差（学生）

質問項目	1年生		3年生	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1. 看護師に英語は必要であると思いますか。	3.22	0.62	3.58	0.65
2. 看護短大での英語教育の必要性はあると思いますか。	3.19	0.63	3.58	0.6
3. 現在の英語教育に満足していますか。	2.49	0.85	2.47	1
4. 看護短大における英語コミュニケーション能力の養成は必要であると思いますか。	3.13	0.68	3.58	0.6
5. 看護短大における英語教育は何年生まで実施すべきであると思いますか。	3.22	0.74	3.24	0.74
9. それ（英語力）は研究（大学、短大、研究所）としての場合と一般の看護師になる場合とでは違うと思いますか。	2.99	0.77	2.54	0.99
10. 看護に関する英語の勉強に意欲を持っていますか。	2.84	0.76	3.07	0.78

表2 各質問項目の平均値と標準偏差（教員）

質問項目	教員	
	平均値	標準偏差
1. 看護師に英語は必要であると思いますか。	3.83	0.38
2. 看護短大での英語教育の必要性はあると思いますか。	3.94	0.24
4. 看護短大における英語コミュニケーション能力の養成は必要であると思いますか。	3.44	0.7
5. 看護短大における英語教育は何年生まで実施すべきであると思いますか。	2.83	0.79
7. それ（英語力）は研究（大学、短大、研究所）としての場合と一般の看護師になる場合とでは違うと思いますか。	3.12	0.6

表3 学生の英検取得級とその割合

	1年生	3年生	全体
5級	3名	0名	3名
4級	3名	4名	7名
3級	18名	9名	27名
準2級	17名	3名	20名
2級	6名	1名	7名
取得級なし（記憶になし）	23名	6名	29名
記述なし	5名	13名	18名
合計	75名	36名	111名

護師経験のある人」など何らかの条件を付したものが見られた。

10 看護短大教員が求める英語教育の目標

「質問3. 看護学生の英語教育における目標（教員用アンケートのみ）」に対してはリーディング力（論文・英文献・カルテ読解）（8名）、英会話力（8名）、医療英単語（語彙力）（4名）、コミュニケーション能力（4名）、リスニング力（3名）、が回答として挙げられた。また、「患者の主訴を聞き理解できる」「英語圏の患者さんに対し簡単な問診が出来る」など具体的なものが多い。さらに「苦手意識を持たずに話そうとする」「しり込みしない」「積極的に話そうとする」「英語を口に出す勇気をもつ」など英語のスキル面ではなく英語を使おうとする態度、つまり情意面に関して述べた回答も目立った。

11 看護短大教員の視点から見た適切と思われる使用教材

「質問8. 適切と思われる使用教材（教員用アンケートのみ）」に対して、リーディング教材（医療

に関する英文記事、論文、専門雑誌）（8名）、リスニング教材（DVD、映画、医療現場を扱った海外ドラマ、音楽）（5名）、スピーキング教材（医療英会話、ロールプレイング練習用）（5名）などの回答が挙げられた。教材ではないが、スピーキング練習タスクとして「外国人ナースについてのディスカッション」や「実習場面を思い出し、それを英会話におこす」「ネイティブではない人が話す英語の聞き取りテープ」などの回答も見られた。

12 学生の英語能力（英検取得級）

日本人英語学習者、特に中学・高校生の英語能力を測るために最もよく使用されているのが実用英語技能検定試験（以下、「英検」）であり¹³⁾、本研究での質問紙調査においても学生の英語能力を知る一つの目安として「質問12. 英語検定の取得級を教えてください」という項目を設けた。その結果（表3）、1年生では「取得級なし」が23名、また3年生では「記述なし」が13名と最も多いことが分かった。また無回答（取得級なし、または記憶にないなど）が1年生で5名、3年生では13名存在するた

め、本調査で得られた英検取得級のデータをもって学生の英語力とすることはできず、あくまでも目安として捉える。上記以外の対象において、取得者が最も多かった級は全体で3級が、次に準2級である。

また、英検以外に彼らの英語力を判断する材料が記述式回答に存在する。「質問7. (質問6に対し) どの程度まで力を付けたいか」の回答に、「簡単な、基礎的な会話ができる程度」「ある程度話せるくらい」「基本的なもの」「挨拶程度の」という表現が多く見られた。

VI. 考察

本研究における質問紙調査の特徴として、学生間(1年生と3年生)、教員と学生間、また教員間における見解の違いが挙げられる。学生間の見解の差として、1年生の回答では「医療系」「医療現場」「実践で」などやや漠然とした表現が目立ったのに対し、3年生の回答は、単に「英会話」と答えるのではなく「臨床で」「病棟で」「外国人患者に問診ができる程度(の英語力を身につけたい)」など、1年生に比べ具体的に医療現場を意識したものが若干多いのが特徴である。教員の回答は、「外国人患者の主訴を聞きとれる」「カルテ読解」「苦手意識を持たず臆することなく話す」など、学生の回答に比べさらに具体的である。

学生の回答の中には、質問の趣旨を理解していないものもあった。「質問8. 看護師として必要な英語力」の回答に「質問6または7と同じ」が何点も見られた。「質問6. 短大の英語教育で伸ばしたい能力」、および「質問7. (質問6に対して) どの程度まで力を付けたいか。」は看護短大における英語教育に関する質問であるのに対し、質問8は看護師として必要な英語力に関する質問であるので、趣旨が異なるということが学生には理解できていないとも考えられる。無回答のものが存在するのも同様の理由からであるとも推測される。

教員と学生間、また教員間の見解の違いも現れている。教員と学生間の見解の差では、「質問9 (教員は質問7). 臨床看護師と研究者の間では必要な英語力が異なるか。」において、教員による回答の平均値が高いのに対し、学生のそれが低く「研究者としての英語力と一般看護師の英語力」に対する捉え方の差が明らかになった。「質問3. 看護学生の英語教育における目標」、「質問8. 看護短大教員の視点から見た適切と思われる使用教材」の質問項目に書かれた多様な目標、および教材は、4技能(「読む」「聞

く」「話す」「書く」)¹⁴⁾あらゆる面を網羅し、その回答は多岐にわたったことから、それぞれの教員間にも見解の差が出ていることが分かる。

この結果を踏まえ、下記の2点について論じてみたい。

1 コミュニケーション能力と看護師および看護学生に必要な英語

学生の自由記述式回答で多く出たものの一つが「コミュニケーション能力」という用語である。しかし、「コミュニケーション能力」とは具体的には何を指すのであろうか。本研究における質問紙調査においても「質問4. 看護短大における英語コミュニケーション能力の養成は必要であるか」を取り上げたが、具体的に「コミュニケーション能力」に対しての定義はしていない。「コミュニケーション能力とは何か?」、この問いに関してはさまざまな解釈が存在するが、小池¹⁵⁾では「コミュニケーション能力」を1) 文法能力、2) 社会言語能力(相手に合わせて話し方や書き方を適切に調整する能力)、3) 談話能力(一貫性のある文章を話す能力) 4) 方略的能力(身振り手振り、言い換えなどを使いこなす能力)としている。小池¹⁶⁾も指摘するように、「コミュニケーション能力」という用語自体に多様な解釈が含まれるため、学生が考える「コミュニケーション能力」には上記以外の意味も含まれることもあると考えられる。「質問4. 看護短大における英語コミュニケーション能力の養成は必要であるか」に対して1年生、3年生ともに回答の平均値が高かったことや自由記述式回答において「日常英会話を学びたい」とする回答が多かったことから解釈すると、「コミュニケーション能力」を「オーラル・コミュニケーション能力」、つまり英会話力に限定して捉えている学生も存在するようである。

さらに教員にとっての「コミュニケーション能力」と学生のそれが一致しているかどうか不明確ではない。教員用質問紙の「質問3. 看護学生の英語教育における目標」に対する回答には「英語を身近に感じられる」「完璧でなくても良いので単語だけ、カタコトでも聞き取り、伝えられるようになる」「尻込みしない、積極的に話をしていける」等の回答が見られたが、これは小池¹⁷⁾の「コミュニケーション能力」に対する解釈の4) 方略的能力(身振り手振り、言い換えなどを使いこなす能力)に該当する。つまり、言葉だけでは表現しきれない部分を、言葉以外

の媒体も使いながら相手に伝えようとする能力である。

本研究における質問紙調査は、看護短大の学生および教員を対象に、A看護短期大学における医学英語教育全般に関し実施したものであるため、対象者が「コミュニケーション能力」を「看護における英語コミュニケーション能力」として捉えたと仮定しても、次に「看護における英語コミュニケーション能力とは何か?」という疑問が生じてくる。さらにこの疑問は「看護師および看護短大生に必要な英語とは何か?」という問題につながる。

「看護師および看護短大生にとっての英語」とはどんなものであろうか。本研究の調査において学生、教員ともに看護師および看護短大生にとっての英語の必要性を強く感じてはいるものの、学生の英語教育への満足度は低いという結果が出た。「質問4. 看護短大における英語コミュニケーション能力の養成は必要であるか」に対する学生の回答平均値は高いものの、「質問10. 看護に関する英語学習への意欲」は、1、3年生ともに回答平均値からそれほど高いとは言えない。「質問5. 何年生まで英語の授業を実施すべきか」、つまり必要な英語学習期間に対する回答からも、学生は2年生、または1年生までとしているが、教員は2年生、もしくは3年生まで必要であると考えていることが分かった。さらに「質問6. 短大の英語教育で伸ばしたい能力」として「(医療に特化しない) 英会話」という回答が多かったが、教員は学生に対して論文や英語文献、カルテなどの読解力の養成を求める他、英語を積極的に使おうとする態度(情意面)を養うこともスキル面とともに重要であるとしたものが多く見られた。見解の違いは教員間でも存在することは前述の通りである。

このように学生間、学生と教員間、ひいては教員間に認識の差が生じていることが明らかになったが、こうした認識差を生じさせる要因の一つに「コミュニケーション能力」と「看護師および看護短大生にとっての英語」に対する見解の差があるのではないだろうか。永野¹⁸⁾が、「看護学生は一般英会話を身につけたいと望む傾向にあるのに対し、教員は読解力の養成を要求している」と述べているように、「一般英会話」を学びたいと求める学生と現場の声との間に格差が生じていると思われる。しかし教員側が学生に求めるものと学生が求めるものに格差が生じすぎては永野¹⁹⁾が指摘するとおり、学習者の動機づけを高め、効果的な英語教育を行なうことは困難で

あろう。V. 調査結果の項目8でも触れたとおり、3年生に比べ1年生に看護に関する英語学習への意欲の低さが現れたのも、実習を経験した3年生に対し、入学して間もない1年生では医療の現場で必要とされる英語に対して認識が薄いためであるとも考えられる。学生自身の英語力に対する自己評価が低いことも意欲の低さにつながっているのかもしれない。

まず「看護師および看護学生にとって必要な英語」とは具体的には何であるのか、ひいては「看護における英語コミュニケーション」とは何かを定義した上で卒業時までに行なうべき目標を明確にし、それを教員側が学生に伝え認識させることが先決であると考ええる。その上で学習期間や内容、使用教材に対しても再考を加えるべきではないであろうか。

この実現のために、看護分野専門教員と英語教員が協力、連携した授業、ならびにシラバスを作成することを提案したい²⁰⁾。看護分野専門教員と英語教員が協力することで英語教員のみでは対応が充分にできない専門知識を補完できるとともに学生のニーズに応えることができるからである²¹⁾。

2 学生の求める指導者

本研究での質問紙調査から、学生の求める英語指導者として「ネイティブ」が最も多く挙げられたが、1年生では「日本人」と回答した学生も同様に存在し、「ネイティブ」と回答した学生との差はわずか4人であった。さらに「ネイティブと日本人」としてネイティブは発音と会話、日本人は文法等、担当する分野を区別する回答や「特に希望なし・どちらでもよい」と答えた回答もあった。しかし「特に希望なし・どちらでもよい」としながらも「教え方の上手な人」「医療現場で働く人」「看護師経験のある人」など何らかの条件を付したのが見られ、こうした記述が3年生よりも1年生において顕著であった。その理由として、本調査を実施した時点において英語の授業を受講していた1年生にとって「誰に教えてもらうか」が切実で身近な問題であったためではないかと考えられる。

本調査では、学生の英語力に関する情報は英語検定取得級からでしか判断できないが、あくまで一つの目安として、取得者が多かった級は3級と準2級であるため、彼らの英語力は概して中学校卒業から高校中級(高校1・2年終了程度)であると考えられ、²²⁾ 全体的に見てそれほど高いとはいえない。質問紙欄外に「英語はキライ」と明記したもの見られ、英

語に対する苦手意識が強い学生が存在することも分かった。また、「質問7. (質問6に対し) どの程度まで力を付けたいか」の回答に、「簡単な、基礎的な会話が出来る程度」「ある程度話せるくらい」「基本的なもの」「挨拶程度の」という表現が多く見られた。こうした控えめな表現は学生自身の英語力に対する自己評価が低いことの現れであるとも考えられる。

ネイティブを求める意見の中には「発音の良さ」を指摘するもの、逆に言えば「日本人は発音が下手」と記述した回答もあったが、こうした問題は音声教材を使いこなすことによってある程度克服することができる。さらに言えば、世界にはさまざまな英語を話す人々が存在し、学生が想像しているであろうアメリカ人やイギリス人の話す英語だけが「きれいな発音」と評価することはできない。教員の回答の中に「非ネイティブが話す英語の聞きとり用音声教材」を適切な教材として挙げた回答があったが、これは異文化理解教育にもつながる問題である。

こうした結果から推測するに、学生にとっては「ネイティブ」「日本人」の枠を超え、分かりやすさ、つまり講師の指導力を求めている意見が多いのではないだろうか。「自信がない」「不安」「英語がキライ」など学生の情意的要因の分析は今後もさらに深めてゆかなければならない議論ではあるが、こうした情意面から起こる問題を緩和するためにも、学生にとって分かりやすい授業をすることが求められていると考える。

Ⅶ. 結論

本研究における質問紙調査から、学生と教員との

間に「看護師および看護学生にとっての英語」に対する認識の差が生じていることが明確になった。学生は「一般英会話」を希望するのに対し、教員は論文やカルテ読解のための「読む力」や「臆せず英語を話そうとする力」を学生に求めていることが分かった。1年生に比べ3年生に、やや現場を意識した回答が見られ、学生間にも見解の差が現れた。また学生は看護師にとっての英語の必要性を認識しているにも関わらず、英語学習に対しては意欲が低いという結果が出た。

Ⅷ. おわりに

A看護短期大学における英語科目である「英会話」、および「医療英語」は『人間理解の基礎』に組み込まれている。向き合う対象が常に「人間」である看護師にとって、「人間を理解する」ためには「言葉を通して理解」しなくてはならず、その言葉を探求する言語教育は人間の本質そのものである。本研究では具体的なシラバスの提示や教材の提案までには踏み込んでいないが、今後看護短大が求める「看護師および看護短大生にとっての英語」とは何かを明確に定義してゆき、それを学生に提示しながらシラバスの改善や新しい教材の開発へと取り組むべく、研究を進めてゆきたい。

謝辞

本研究に協力してくださいましたA看護短期大学の先生方ならびに学生の皆様に心より感謝申し上げます。

参考・引用文献

- 1) 永野喜子. コメディカル養成過程の英語教育におけるニーズ分析とコース評価－学習者の情意的要因－. ESPの研究と実践 (大学英語教育学会九州沖縄支部 ESP研究会). no.7, 2008, p.12.
- 2) 3) 4) 鈴木由美. 過去2年間にみる医学英語に対する助産師学生のニーズ. 桐生短期大学紀要. no.18, 2007, p.137-140.
- 5) 18) 19) 永野喜子. 日本のコメディカル養成課程における英語教育－アンケート調査結果に見られる医療現場のニーズと学生の意識との差－. ESPの研究と実践 (大学英語教育学会九州沖縄支部 ESP研究会). no.6, 2007, p.59.
- 6) 7) 前掲 5), p.59.
- 8) 12) 川北直子. 看護大学における英語教育へのニーズ分析－宮崎県立看護大学における事例より－. ESPの研究と実践. no.4, 2005, p.31-41.
- 9) 10) 11) 川崎市立看護短期大学. HANDBOOK OF COLLEGE LIFE 2010. 2010.
- 13) 22) 日本英語検定協会. “試験の内容” < <http://www.eiken.or.jp/exam/index.html> >

(入手2010-10-31).

- 14) 岡秀夫監訳. 外国語教育学大辞典. 大修館書店, 1999, p.183.
- 15) 16) 17) 小池生夫. 応用言語学事典. 研究社, 2003, p.88.
- 20) 杉山明枝. 医学英語に対する理学・作業療法士学生のニーズ. 日本医学英語教育学会会誌. Vol.9, 2009, p.39-47.
- 21) 川北直子. English for nursing 教材論への導入: 日本の看護大学の場合 (シンポジウム報告「ESP 教材論--Specific and/or General」(2001年9月14～16日 JACET 全国大会 (藤女子大学) にて)). ESP の研究と実践. Vol.1, p.30-42.
- 23) 高木久代. 医療系大学における英語教育. 鈴鹿医療科学大学紀要. Vol.18, 2008, p.41-51.